



季節を知ったら  
暮らしが楽しくなった

（第七五号）

大寒

一月二〇日



## 湯玉

古い注連縄を氏神さんで焚き上げる「どんど火」は、お正月をしめくくる一つの行事です。ほぼ一月七日から二月三日の節分までに行われますが、二見の栄野神社では毎年一月一四日、どんど火の日に穢れを払い、無病息災を願うという湯立神事があります。

あまり知らない集落の路地というのは、異次元に入り込んでしまうような小さな不安と、探検心をそそるわくわくした気持ちがあ交錯します。江川の河口にある江地区へ日の出橋から入ると、引き返そうか、不安な気持ちの方がまさりました。前方を行く車の後について集落を抜けると、ようやく踏み切りの向こうに神社の森を見つけました。「栄野」と書くところからないのですが、「江の」神社です。地元の人々が手に古い注連縄をもって次々に境内に入っていきます。

栄野神社は二見興玉神社の摂社で、当日は神職や巫女が奉仕し、まずは本殿を開扉して例大祭がありました。祭神は大若子命と佐見津姫。大若子命は外宮の神官、度会氏の孫先といわれ、佐見津姫は倭姫命に堅塩を献上した地元の女神。不思議な組み合わせです。

祝詞奏上がすむと、緋袴にたすき掛けの巫女が、湯立の舞いと称して、直径一mの湯釜の回りで熊笹を豪快に振り回し、地元の人々に湯をあびせます。江戸時代の御師邸での神楽絵図も湯釜が煮えて、巫女が熊笹で降り注ぐものがありますから、このような神事だったのでしょう。沸騰時に沸きあがる湯の泡は、飛沫ではなく「湯玉」と呼びます。湯にも魂が宿っているような言葉。玉のように飛び散る湯玉には力強さがあります。火渡りと同じで、この湯玉で身を清めるといいます。周りの人を見れば、ジャンパーに湯玉をたくさんつけて、うれしそうなこと。気分も一新して、寒さを取り切りたいものです。

文 千種清美

